

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

# とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ  
Shiina Howahowa

18

### レイジ

重鎧で身を固めた  
『スルーカラー』の  
頼れる男性タンカー。

### カザミネ

氷の魔大太刀を操る  
『スルーカラー』の  
凄腕アタッカー。

### アクア

妖精国の象徴・  
ピカーシャの一体。  
お忍びでアースの旅に  
同行する。

### ルエット

アースの指輪に宿る、  
フェアリークィーン  
の分身。

### ツヴァイ

有力ギルド  
『スルーカラー』の  
リーダー。  
炎の魔剣持ち。

### エリザヴェート

『スルーカラー』所属の  
金髪縦ロール系  
魔法少女。

### ノーラ

『スルーカラー』  
メンバーである  
短剣使いの  
勝気な女盗賊。

### ロナ

『スルーカラー』で  
前衛を務める、  
ロリ巨乳・僕っ子の  
女性格闘家。

### ミリー

『スルーカラー』の  
女性魔法使い。  
ツヴァイとは  
ギルド結成時からの  
付き合い。

### アース

本編の主人公。  
マイペースなプレイぶりで  
知る人ぞ知る存在に。  
リアルでは38歳独身の  
会社員、田中大地

登場人物  
紹介

今日も自分は、VRMMO「ワンモア・フリーライフ・オンライン」の世界に「アース」としてログイン。魔王領を大寒波から守るため、今日は色々と頑張らないと。

まずは、薪作りまきに同行してくれるギルド『ブルーカラー』のメンバー、レイジとコーンポタージュとフォルカウスの街で合流し、挨拶を交わす。頭の上にはいつも通りアクアを乗せて。

「じゃあ、今日はよろしく」

「まずは木材の切り出しだったか？ この辺のモンスターならば俺とコーンポタージュだけで十分対処できるから、そっちは安心して動いてくれ」

と、レイジの頼もしいお言葉。まあ、盾役としていつも『ブルーカラー』の最前線に立つ彼の実力をもってすれば、この辺りのモンスターなど相手にもならないことは自分もよく理解している。更にサポートとして魔法使いのコーンポタージュまで同行しているのだから、危険は一切ないな。モンスターに絡まれても、この二人に任せっきりでいいだろう。

「レイ君と私がモンスターを受け持つから、アース君は生産のほうをよろしくね。うーん、私も何か一つか二つぐらい生産系のスキルを覚えようかなあ？ でもそうすると成長限界が低くなっちゃうんだよね……」

そうなんだよな。コインポタージュの言う通り、手広くやろうとすると成長限界が低くなってしまふというのが、「ワンモア」における決まり事の一つ。この制限があるおかげで、一人で何でもできる完璧なプレイヤーは存在しない。その一方で、こちらの世界の住人の中には、何でもこなせるスーパーなお方が稀まれにいるらしい。

「よっぽどの事態でない限り、今日は自分は戦闘に参加しないつもりなので、お二人には頑張ってもらうことになります。とりあえず、木材の切り出しができる場所に向かいますようか」

早速、自分を先頭にして三人で行動を開始する。

街から出ると、時々こちらを見つけたモンスターが襲い掛かってくるが……レイジの持つ片手斧の錆さびとなるだけであった。自分はもちろん、コインポタージュの出番すらほとんどない。大雪の間宿屋に閉じ込められていた鬱憤うっぷんを晴らすのごとく、レイジは斧を振り回してモンスターをブツ飛ばしていく。

「強い人と一緒だと楽ができていいな……じゃ、ここの木を数本切り倒していくから、その間の護衛をよろしく」

「ああ、任せてくれ」

レイジとそうやり取りをしてから、頭に乗っていたアクアには地面に降りてもらい、自分は木こりの斧を取り出して伐採を開始。念のためログイン前にも一度、掲示板などで確認しておいたところ、この木材の価値が急に上がったということはないようだ。相変わらず、主に龍の国産が良質な木材として扱われているよう……

あとは、この前『ブルーカラー』のメンバーと行った、植物メインのダンジョンにたまたま生えている巨木が当たりだとか何とか。こっちは自分で実際に目にしたわけではないので、本当に良質なのかどうかは不明だが。

「倒れるぞー、注意してくれよー」

もちろんレイジたちのいる方向に倒れないように注意はしているが、それでも絶対に声はかけるべきだ。味方が倒れる木の下敷きになるなんてことは避けなきゃだからなあ。

幸い、伐採中にモンスターに襲われることもなく、数本分の木材を確保できた。とりあえず今日は様子見だから、この程度でいいだろう。

「この一本で最後にするから、もうちょつとだけ周囲の警戒をよろしくー」

「りよーかいだよー」

自分でも《危険察知》を使って注意を払っているにしても、やはり作業中は注意力が落ちる。他

の人の目視による警戒があったほうがありがたい。

そうして、最後の一本も無事に伐採が完了。大雑把に処理を施したらアイテムボックスの中へ。とりあえずこんなものか。実は、前日に龍の国に飛んで用意した<sup>もみ殻</sup>籾殻と<sup>いなちり</sup>稲藁で、アイテムボックスの中身がいっぱいだったたりする。

「おまたせ、とりあえずこれで材料は確保できた。次はいよいよ炭を作るために、場所を変えるよー」

「おう、了解」

「はい、それじゃいこっか」

二人に声をかけて移動開始。

ある程度南下して、地面が雪に覆われていないところに行かないといけない。火を使うので、雪の上でやったらべちゃべちゃになる。それでは炭作りなんて成功するわけがない。

しばらくして、ようやく良さそうな場所を見つことができた。さて、ここからは自分が頑張らないとな。

「この辺が良さそうなんで、そろそろ作業を始めるよ。悪いけど、また周囲の様子を見てほしい」

「ああ、任せとけ」

レイジに心強い返事をもらい、炭作りにとりかかっていく。

まずは地面に籾殻を丸く平らに敷く。このとき、量はケチらず、それなりに。その中央には、稲藁を束ねて立てておく。この稲藁が導火線代わりとなる。

お次に、敷いた籾殻の上に細く切った木を数本、カタカナの口の字を描くように横倒しで配置する。この木が蒸し焼きの燃料となるので、忘れてはいけない。

続いて、上からたっぷり籾殻を振りかける。その際、全体が台形になるようにする。

それから、炭にする木材をこの台形にした籾殻の上に置いていく。ちゃんと熱が通るよう、木材同士は隙間を空けておかなければいけない。

木材を敷き詰め終わったら、もう一度籾殻を振りかけてからまたその上にも炭にする木材を置いていき、更に籾殻を振りかける。

これで、横から見ると、籾殻の小山の上から大体三分の一と三分の二に当たる部分に、炭にする木材が仕込まれていることになる。

あとは、籾殻の小山の頂上を少し掘って中央に立てて置いておいた稲藁の先端が見えるようにしたら、準備は完了。稲藁の先に火をつけて、炎上しないようにだけ気を配りながら、ゆっくりと蒸し焼きにすればいい。こうして熱を加えられども燃え上がることなく不完全燃焼した木材が炭となる、という寸法だ。

「——本当に窯を使わないんだな。俺も軽くネットで調べてみたら、炭を作るにはそれなりの設備が必要だと分かって、難しいと思っていたんだが……」

警戒しつつも自分の作業を見ていたレイジから、そんな言葉が漏れた。

うん、それも間違っていない。確かに窯を使う作り方が普通だ。

「これは、自分の爺ちゃん（じいちゃん）が、炭が急遽必要になったときにやってた手段だね。小山にした粉殻（こな）の中でじっくりと木を蒸し焼きにすることで、窯と同じような環境を作るんだ」

ホントにもう、この簡素な炭作りの方法を使う日が来るとは思わなかったよ。

「もちろん窯で作るより量も質も下がるんだろうけど、今は窯を一から作っている暇はないからね……ひとまずこの方法が『ワンモア』でも通じるか試したんだ。おそらく魔王領のほうでも今必死に炭を作っているはずだから……その炭が出来上がるまでの時間稼ぎになればいいかな」

稲藁が静かに燃えて、その姿は粉殻の小山の中に消えていく。粉殻が燃え上がらず、ゆっくりと灰になっていけば成功だ。逆に、火が出てしまったら失敗、木材は炭ではなくただの灰になってしまう。

「なんかこう、予想していたのと全然違うね……本当にこんなので炭が出来るの？」

コインポタージユが不安になるのも無理はない。自分だって、実際に爺ちゃんが作るのを見なければ信じられないし。

ちなみに現実だと、粉殻が全部炭になるまで数時間を要した。しかも完成にはそこから更に一日放置しておく必要があるんだが……

「お、アース。ツヴァイたちが来たぞ」

レイジが場所を連絡してくれたんだろう。やってきたツヴァイの後ろには、いつものメンバーに加えて、初見の人たちが十人ほどいた。ちなみに男性が二、女性が八の割合だ。

「アース、調子はどうだ……ってそんなに早くポンポン出来るわけないか。とりあえず、うちのギルドの中でも生産に長けているメンバーの中から今日都合がついた奴だけ連れてきた。炭作りの方法を教えてもらえれば、十分な仕事ができるはずだぜ」

ここで職人さんが合流か。さて、どう説明したものか——

「アース、ちょっと来てくれ！」

突然レイジが大声を上げたので、そちらに急行。レイジが指さした先には、徐々に灰になっていく粉殻の小山があった。

やっぱり。ゲーム故に、リアルだと数時間かかることもここまで短縮されるんだな……そういう設定になっていてくれて助かった。さすがに一昼夜待つのはきつい。

「大丈夫、これで良いんだ。とりあえず、このまま粉殻の小山が全部灰になって冷め切るまでは放置だ」

自分の返事を聞いたレイジは、「そうか、ならいいんだ」と落ち着きを取り戻した。

さて、上手い説明方法が考えつかないから、実際にやって見せるかな。そう思い、アイテムボックスの中から、大量に買い込んできた粉殻と稲藁をほぼほ出してしまふ。

「おいおい、あれなんだ？」

「稲藁……？ 何に使うのでしょうか？」

なんて声も聞こえてくるが、まあ変わった方法だし、手順を知らなきゃ予想だつてできないもんな。

そんな彼らの前で、さつきやったのと同じ手順で、中に木を仕込んだ粉殻の小山を作り、あとは稲藁に火をつけるだけというところまで見せる。

「と、こんな感じで木を蒸し焼きにできる状態を作ります。大事なのは、火を出さずにゆっくりと粉殻を灰にしていく点ですかね……で、あそこの灰の小山が、さつき同じ方法を試したものです。上手くいってれば、中に仕込んだ木が炭になっているはずですよ」

リアルとは必要とする時間とかが全く違うので、自信があるわけではない。全部が成功とはいかなくても、せめて半分ぐらいは炭になっていてくれるとありがたいんだが……窯を使う方法は知らないし、資材もない。この方法が通じてくれることを祈るのみだ。

多くの人が見守る中で、粉殻の小山から完全に熱が引いた。恐る恐る灰をかき分けて、中に配置

した木を発見。ゆっくりと掴み取る。

製作評価が低くてもいいから、これで炭になってくれれば助かるのだが。

果たしてその結果は――

### 【炭】

着火すれば魔力をいれずとも長く熱を発し、加えて大きく燃え上がることもない安全性から、魔王領では昔から暖を取るために使われてきた。

これにとつて代わる品は未だ見つかっておらず、魔王領に住む者にとって炭を切らすことは死活問題のため、需要は絶えず存在している。

製作評価…3



よし、成功した！ 喜びよりも安堵の感情が自分を包む。作ろうと言い出して、失敗しました、ではあまりにも格好がつかないもんな。

灰の中から次々と木材を取り出して、大半が製作評価3で、たまに4が混ざる程度だが、

仕込んだ木材の全てが炭になっていたという事実が大きい。

これで、この方法でも炭を作り上げることができると分かった。つまり、魔王領を悩ます炭不足問題に歯止めをかけられる可能性が生まれたのだ。

「ど、どうだったんだ？」

心配そうに問いかけてきたレイジに、炭となった木材を一本投げて渡す。

それを受け取ったレイジは無事に炭が出来上がったことを確認すると、コーンポタージュにも見せて頷き合ってから、自分に向けて親指をグッと立てた。

「よし……アースの方法で炭が作れることは、最初から最後まで見ていた俺とコーンポタージュが保証する。職人チームは、早速アースから教わった方法で炭作りを始めてくれ。もしモンスターがやってきた場合は、俺たち戦えるメンバーが全力で排除する。心配しなくていいぞ！」

レイジの言葉に『ブルーカラー』の職人さんたちが一斉に頷き、自分が用意しておいた木や粉殻で次々と小山を作り始める。

手順は単純なので、このまま上手くいってくれると思ったのだが……

「ひ、火が強くなりすぎて燃えちゃってる!!」

「こっちも、全部普通に燃えてしまっている!」

と、粉殻の小山が着火直後に轟轟と燃え上がってしまい、全体の四割ほどが灰になってしまった。更に……

「ダメだ、炭になってない……」

「こっちも、ただのすすけた木材だ……ゴミになってしまったぞ」

静かに灰になった小山でも、肝心の木材が炭にならなかったケースが大半。結局、自分が作った小山以外は全滅してしまった……

「なぜだ？ アースさんの小山と俺たちの小山のどこが違う？」

「同じように作ったはずなのに……」

職人チームの皆さんはそんな疑問に頭を抱えている。

自分が見た限り、確かに作り方に間違いはなかった。なのになぜこんな差が出るんだろうか？ 職人さんたちのほうが生産関連のスキルレベルは高いはずなので、自分が失敗して職人さんたちが成功する、ということだったならば納得がいくのだが……

「ちよつといいかな？ アースさんの生産スキルって何があります？ レベルとか細かい点はいいいので、系統だけ教えてもらえませんか？ 〈鍛冶〉とか、〈料理〉とか」

——そうか、その可能性があったか。

自分にあつて職人さんたちにはないスキルがあつて、それが結果に影響したのかもしれない。

自分の持っている生産系統のスキルは、〈木工〉〈鍛冶〉〈料理〉〈薬剤〉だな。そのことを伝えると……

「私、〈料理〉がない」

「俺は〈木工〉と〈薬剤〉がないな。もっぱら〈鍛冶〉担当だったし」

「あたしは〈料理〉と〈鍛冶〉がないね」

「〈料理〉以外持っていない……」

「ギルドの職人同士で生産に必要な加工材料のやり取りができたから、各々取得するスキルを絞ってそれに集中することに成功したけど……こんなところにその弊害が出ちゃったみたいね」

あれま。まさかこの方法で炭を作ろうとすると、広く浅くでいいから生産関連のスキルを複数修めていないといけないのか？

〈木工〉はまあ分かる、炭作りは木を使うからね。〈鍛冶〉もまあ、火を扱うって点で必要なのかもしれないな。こじつけに近いけど。〈料理〉は、木を蒸し焼きにするからか？ 食べ物の製作じゃなくても応用が利く可能性があったのか。一番分らないのが〈薬剤〉だが……何らかの反応を起こすために必要なのかもな。

「つまり、自分が持っている四種類の生産スキルを身に付けていないと、他のスキルのレベルが高くてこの方法はダメという可能性が……？」

自分の呟きに、職人さんたちが一斉に頷く。

同じようにやって、自分だけが成功して他が全員失敗となれば、確かにその線が一番有力なのかもしれない。そうすると、どうすべきか……

いや、待てよ？ 今までこの世界で、一から十まで一人で材料を揃えて加工して作らなきゃ品物ができない、なんてことがあったか？ 自分の弓のときだって、弦なんかは他の職人さんの作った材料を使用した。となると、今回の炭作りにもその法則が適用されるのではないだろうか？

「ちよっと聞いてほしい。やれそうな方法を思いついたんだけど、試してみないか？」

つまり、粉殻の小山を作るのは〈木工〉スキルを持った人が。火をつけるのは〈鍛冶〉持ち、経過を見守るのは〈料理〉持ち、最後に灰の中から取り出すのを〈薬剤〉持ちがやる——例えばこんな風に、職人さんたちに役割分担させるのだ。

正直〈薬剤〉の位置はよく分からないものの、最後の仕上げに何らかの要素が絡むのでは、とアタリをつけて、この立ち位置にしてある。そんな風にトライ&エラーが必要になるだろうが、自分一人しかこの方法を使えないのでは生産性が悪すぎて話にならないから、とにかく試してみるべきだ。

「——そうね、そもそも生産は色々挑戦して物を作り上げるんだものね。何回かやってみよう」

女性職人さんのこのひと言で、分業制を試してみることが決定。その後も数回の失敗こそあったが——〈木工〉職人が粉殻の小山を組み立て、〈鍛冶〉職人が火をつけて粉殻が全て灰になるまで見守り、〈料理〉と〈薬剤〉職人さんが炭を取り出す、という形にすると、失敗せずに作れるようになった。

それぞれのスキルがどう関わっているのかは想像するしかないが……肝心なことは、炭を失敗せずに作り出せるようになったという一点だけだ。

「出来たぞ、評価5の炭だ！」

「評価4だけど、こっちも完成よ！」

そんな声があちこちから上がる。作り方が安定すれば、スキルレベルも含めて自分などよりよほど腕のある職人さんチームは、製作評価値がそこそこ高い炭を量産できるようになった。

途中で木材が足りなくなつたので、何回か〈木工〉スキル持ちの職人さんたちに切り出しに向かつてもらった。もちろんツヴァイをはじめとした護衛付きで。

更にツヴァイが『ブルーカラー』のメンバーに指示を飛ばし、龍の国から粉殻と稲藁を追加調達し始めた。この場所に届けられるのは明日になるが、今日のところは自分が用意しておいた分で何とか賄<sup>まかな</sup>える。

「これだけ炭があれば、少しは状況を良くすることができようか」

自分と『ブルーカラー』の職人さんたちが次々と作り上げていく炭の山を見つめて、カザミネがそう漏らした。

「そうだとよかつたんだが、状況はもつと悪くなつてるようだ。アース、ちょっと手を止めてこれを見てくれ！」

ツヴァイに呼ばれた自分は、いったん炭作りを職人さんたちに任せて持ち場を離れる。何か問題があったのだろうか？

「ツヴァイ、何があった？」

自分の問いかけに対して、ツヴァイはプレイヤー同士の情報交換の場となっているある掲示板を、こちらにも見えるように表示させた。

「なるほど……これは荒れそうだ」

急いでその内容に目を走らせると、こんなことが書かれていた——

いくつかのギルドがダンジョン探索のために無理やり炭を買い集めていた影響で、街に住む魔族の皆さんに行き渡らなくなり、暖を取るのが困難化。そのため、全ての店はいったんプレイヤーへの販売を停止して、魔族の人たちを優先する形に切り替えたい。

掲示板にはそういった情報の他にも、店に脅しをかけたりにして炭を買い占めていたギルドへの怒りのコメントや、それへの反論、そもそもこんな状況を作る運営が悪い……などといった声が上



### 【スキル一覧】

- 〈風迅狩弓〉 Lv 50 (The Limit) 〈碎蹴さいせう〉(エルフ流・限定師範代候補) Lv 42 〈百里眼ひゃくりがん〉 Lv 38
- 〈技量の指〉 Lv 55 〈小盾〉 Lv 42 〈蛇剣へびけん武術身体能力強化〉 Lv 3
- 〈ダーク・スラッシュャー〉 Lv 3 〈義賊頭ぎぞくかしら〉 Lv 47 〈隠蔽いんぺい・改〉 Lv 7
- 〈妖精招来〉 Lv 18 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能)
- 追加能力スキル
- 〈黄龍変身こうりゅうへんしん〉 Lv 13 〈偶像の魔王〉 Lv 1
- 控えスキル
- 〈木工の経験者〉 Lv 13 〈上級薬剤〉 Lv 47 〈釣り〉 (LOST) 〈料理の経験者〉 Lv 27
- 〈鍛冶の経験者〉 Lv 31 〈人魚泳法〉 Lv 10

### EXP 27

称号…妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者

妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相

託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー(胃袋限定) 義賊 人魚を釣った人

妖精国の隠れアイドル 悲しみの激情を知る者 メイドのご主人様(仮) 呪具の恋人

がっており、書き込みが進むごとに物々しい雰囲気になっていった。

「これは、尚更この炭作りに力を入れなきゃマズいな……プレイヤーは炭がなくても冒険できない程度だからまだいいが、魔族の皆さんの中に凍死者が出たりしたら、両者の間で争いが起きかねない。そうなったら魔王領での冒険どころじゃないぞ……」

「ワンモア」の世界ではどんなことであれ、想像できることは現実になり得る。今まで発生しなかったから、という理由で今後も発生しないと断言できることは、何一つないのだ。

「ワンモア」ではプレイヤーがプレイヤーを無差別に襲う行為、いわゆるプレイヤーキラー行為は不可能である。しかし、プレイヤーが「ワンモア」世界の住人を襲ったり、また逆に「ワンモア」世界の住人からプレイヤーが襲われたりすることは普通に起きている。実際、自分も「ワンモア」の住人である悪党を斬っているし、ツヴァイのように魔剣目当てに襲われた例もあるからな。

そして、より大きな単位での争い、つまり一国の住人全員&その国を支援するプレイヤーVSプレイヤー、という構図の戦争も十分に起こり得る。

「ゲヘナクロスのときのような事態は御免だぜ……そのためにも、申し訳ないがアースたちには頑張ってもらうことになるな……出来上がった炭は俺たちが必ず無事届けるからよ、頼むぜ」

事態は予想より深刻化しているな……よし、今日ログアウトする前に、あいつらの手を借りることにしようか。

魔王の代理人 人族半分辞めました 闇の盟友 魔王領の知られざる救世主 無謀者  
魔王の真実を知る魔王外の存在 天を穿つ者  
プレイヤーからの二つ名：妖精王候補（姫） 戦場の料理人  
強化を行ったアーツ：《ソニックハウンドアロー Lv5》

2

それから、職人全員が協力して炭を量産、戦闘職はその職人さんをきっちり護衛という連携で動き、纏まった量が出来た。

多数の煙が上がっていたためか、ちよくちよくモンスターがやってきた。もつとも、ツヴァイをはじめとした『ブルーカラー』の戦闘職メンバーの前に、為す術もなく吹き飛ばされたが。

「よし、こんなところかな。作った炭の運搬は頼んだよ」

ここから先は自分の手を離れ、出来上がった炭を魔王領の街に運搬する役目は、予定通りツヴァイたちに任せる。

「おうよ、しっかり届けるから任せとけ。で、だ。もし、この炭を作った人物は誰だ、って聞かれた場合は、アースの名前を出してもいいか？」

ツヴァイの質問に、うーん、どうしようかと頭を悩ませる。今まで結構いろんな場所で動いてきたから、自分の名前なんて知ってる人は知ってるだろうしな……別にいいか。

「聞かれたら、言ってもいいよ。だけど、そっちのギルドの職人さんたちの名前も言ってくれよ？ これだけの量を作るのは、自分一人じゃ絶対に無理だったんだからな」

炭の品質はばらばらだが、今は質より量が大事だ。それに製作評価は悪くても3だから、使い物にならないということはない。

「それでもアースが音頭を取ってくれなきゃ、こうやって炭を作るなんて話にはならなかったんだ。だから聞かれたら答えておきたくてよ。人知れず積む善行もいけど、声に出すべきこともあると思うからな……安心しろ、あくまで魔族の皆さんにだけ伝えるってことしておくさ。最悪の展開を迎えて魔族の人たちとプレイヤーが争うことになっても、炭を提供するような協力者には手を出さないだろうしな」

——そうか、そういう考えもあるのか。もちろん争い合う展開を望んでいるわけではない。ただそういったことが起こる可能性がある以上……事前対策、という言い方だと腹黒い気もするが、こちら側に協調の意思があると示しておくのは意味があるな。

ツヴァイの考えも分かったことだし、ここはそれに乗っておこう。

「掲示板を見ても、状況があんまり良くないってのは嫌でも伝わってくるから、そうしておくのが無難か。ツヴァイの判断を尊重するよ。あと、いくらで売るかってのも任せるが、馬鹿みたいに釣り上げる真似だけはしないでくれよ」

「分かってるって。困ってる連中の弱みに付け込むような真似は、言われなくたって絶対やらないぜ」

その後、皆でフォルカウスの街に帰還した。

「んじゃ、俺たちは魔王領に行くから、運搬に参加するメンバー以外はここで解散、明日余裕があるならまた集まってくれ！」

そう言い残して、ツヴァイをはじめとした数名は北に消えていく。その見送りを済ませた後、残ったメンバーは解散となった。自分は今アクアと一緒に宿屋に入ってログアウトするだけだ。久々に大量の生産活動を行ったので、ちょっと疲れた気もするが……ログアウト前にやっておくべきことがある。

宿屋を見つけて個室を確保した自分は、部屋に入ってから手を二回ポンポンと叩く。すると待つてましたとばかりに、〈義賊頭〉としての自分の部下である義賊小人たちのリーダーが天井裏から

下りてきた。

「親分、お呼びで」

小人リーダーの言葉にゆっくりと頷いてから、自分は今回の仕事内容を告げる。

「もしかしたらお前たちもすでに情報を仕入れているかもしれないが、今の魔王領では炭不足が問題となっている。その原因は、一部の阿呆<sup>あほう</sup>が炭を買い占めたせいなんだがな……これを黙って見過ごしては、義を掲げる我らの名に傷がつく。分かるな？」

自分の言葉に頷く小人リーダー。

「へい、あつしらの普段の仕事とは異なるとはいえ、ここで救いの手を差し伸べぬのは義に背く行為であるとあつしも思いやす。むろん与えずぎては怠惰<sup>たいだ</sup>を招いてしまいが、かといってかの地に住まう者たちが凍死するようなことになれば、取り返しがつきやせん。実は親分、あつしらのほうでも情報を集めた結果、配下二人の表の稼業の一つである炭焼きを、他の配下たちにも支援させておやす。あと一日貰えれば、炭を提供できやす」

なるほど、すでに動いていたってわけか。相変わらず有能だな、ありがたい。

「よし、ならばその炭をそここの値で魔王領に流してやれ。ただし、売る相手は魔族限定にすると一筆書いてもらえ。炭が入ってきて多少安定したからと、また買い占めが始まったら目も当てられん。ひとまず今はあちこちから炭を流し、凍死する者が出るといふ最悪の事態を迎えないように

することが最優先だ。冒険をしたい者たちへの炭の供給はずっと後でいいからな」

小人リーダーは黙って頷く。その辺は心得ているってことだろう。

「炭の供給量の塩梅はお前たちに一任する。いちいち指示を飛ばさずともやれるだけの能力をお前たちは持っている」と理解している。だがこの炭の一件、しくじれば、罪なき民の血が大量に流れる事態に発展しかねん。今回は直接斬り合うような仕事ではないとはいえ、臍<sup>ふ</sup>抜<sup>ぬ</sup>けた行動だけはするな。いいな？」

小人リーダーは「へい、親分の顔に泥を塗るような結果には致しやせん」と言い残し、姿を消した。

これで炭の供給量はもう少し増えてくれるだろう。あとは、自分はひたすら『ブルーカラー』のメンバーと協力して炭を作り続けるだけだ。

このひどい吹雪もあと少しで去るといふ情報もある、ここが踏ん張りどころだろう。とりあえず、今日はログアウトだな。

——その頃、炭を売りに行ったツヴァイたちは……——

「ああ、いらつしやい。何が入用だい？ 悪いが、炭は品切れだよ」

店に入ってきたツヴァイを見ると、魔王領の街にある道具屋の店主はそう声をかけてきた。ツヴァイはできるだけ穏やかな表情を心がけつつ近寄って、小声で話しかける。

（いや、俺たちは逆なんだ……炭を売りに来た。だけど、今は大きな声でそのやり取りをするわけにはいかない。炭を買い占めたい奴がどこにうろついているか分からないから……）

その内容に、店主は顔色を大きく変えた。

「ああ、その商品でしたらこちらの別室にあります。お手数ですが、ついてきていただけますか？（本当ですか!? と、とにかくこちらへ）」

適当なことを言った後にやはり小声で答えつつ、店主は店員を呼ぶ。

「おい、ちょっと俺はお客様を案内するから、店番を頼むぞ」

「へー」

そうして、ツヴァイたちを店の奥の部屋に連れていき、座らせた。

「単刀直入にお聞きします、本当に炭を売ってくださいるのですか？」

店主の表情は真剣そのもの。というのも、すでに炭の在庫はほんの僅かで、売るところか自分たちで使う分すら危うくなってきた。

しかも次の仕入れもいつになるか分からないという、かなり切羽詰まった状況に置かれていたのである。

「百聞は一見に如かずと言うからね、まずはこれを見てよ」

ロナがそう言いながら、持ってきた炭の一部をアイテムボックスから取り出して、店主の前に提示する。

その炭を手に取り、念入りに見ていた店主であったが、やがて「確かにこれは炭ですな。品質のばらつきこそありますが、全て使う分には問題のないレベルでしょう」と認める。

「魔族の皆さんは、一部の連中による脅しを含む炭の買い占めのせいで、寒さに怯える日々を送っている」と聞いた。その詫びというわけじゃないが、俺たちは何とか炭を用意して魔族の皆さんに提供することにした。肝心の値段は、こんな状況になる前くらいの金額でどうだ。悪いが、多少は貰わないと、次の炭を作れないんでな」

ツヴァイの言葉に長考した後、店主が口を開く。

「こちらとしては、どんな条件を言われても、炭が手に入るのであれば呑むしかないので……

しかし、炭を買い占めた人たちは各地のダンジョンで荒稼ぎして資金は潤沢だと聞いています。なぜ、炭を高く売れるところに持つていかないのです？ 我々にこうして売っていただいても、皆様が受ける恩恵が見えないのですが」

この質問に答えたのはレイジだ。

「俺たちは、魔族の人たちと仲良くやっていきたいだけだ。炭を作った奴も同じ考えで、今回の急場を凌げるだけの炭を作ろうと俺たちに提案してきたんだ。皆が皆、我欲を満たすためだけに行動してるわけじゃない。そこだけは分かっただけよ」

この言葉に再び長考した後、店主は「そうですね、分かりました。その考えに感謝します」と口にしてから、ツヴァイたちに頭を下げた。

「それともう一つ、これはこっちの我儘だから聞いてくれなくてもいいんだが……俺たちが売る炭は、必ず魔族の皆さんだけに売ってくれないか？ 俺たちは魔族の皆さんのために作ってきたんであって、買い占められるために作ったわけじゃないからな」

ツヴァイの言葉に、了解しましたと頷く店主。そして――

「この炭を用意してくださった方は何者なのですか？ 我々に大事な炭を提供してくださった上、最低限の代金しか要求しないという。とても情に厚い方であると感じます。ぜひ、お名前だけでも伺いたい――」

そしてツヴァイは、今回の行動がアースの音頭で始まり、自分たちのギルドが協力する形で行われていることを告げたのだった。

この後、ツヴァイたちはいくつかの道具屋を回り、炭を安値で売っていった。これにより、アースと『ブルーカラー』の名声は、大半のプレイヤーの目には見えないところで上がっていくこととなった。

### 3

それからリアル時間で一週間ほど、炭作りは続いた。今はもう自分と『ブルーカラー』のメンバーだけでなく、八十人近い協力者と共に炭作りを行っている。ここまで人数が膨れ上がるとは、ちよつと予想外だったな。

炭作りをするようになった原因である吹雪は、リアル時間で三日前に収まった。

魔王様から各街に吹雪の鎮静化宣言も出され、さて、これで冒険に戻れるぞ、めでたしめでたし……となれば良かったのだが、そうは問屋が卸さなかつた。

その理由は、吹雪がやんでも収まらなかつた炭不足にある。

魔族の皆さんも炭焼き窯を全力で稼働させて生産に励んでいたが、なにぶん炭を買い占めていたギルドの炭消費量が半端ではなかつたことが原因で、まだまだ炭の値段は高いままであつた。

そして、それが誰に一番影響を与えているかと言えば、魔族領の一般市民である魔族の皆さんである。

当然ながら、彼らは炭を買い占めたギルドに対して強い不快感を持っていた。面と向かつて罵詈雑言をぶつけるなどの目に見える衝突にまでは至らなかつたものの、色々な行動にその影響が現れた。

具体的に言えば、炭の買い占めに関わつたプレイヤーに対してはお店が商品販売価格を上げたりわざと品質の良い物しか売らなかつたり……高くなつてしまった炭の代金を間接的に徴収するような動きが見られた。

そして、そんな対応をされた側も文句を言うようになっていった。

こうして、炭という魔王領における生活必需品の不足がきっかけで、あちこちでごたごたが見受けられるようになってしまったのだ。

そんなごたごたを抑えるにはどうしたらいいか？ 一番確実なのは、炭の値段が高騰する以前の基準に戻ることだ。

しかし、それをただじっと待つだけでは、いつになるか分からない。そして何も手を打たなければ

ば、そう遠くないうちに血を見る事態にまで発展するのは誰の目にも明らかだ……というのが、情報を集めてきたツヴァイたちと小人リーダーの双方に共通した意見だった。

むろん、この問題は炭を買い占めた一部のプレイヤーたちが発端だ。売った側にも色々事情があったのだが、極端に値上がりしてもなお、買い占めが止まらなかったのである。最終的に元の五倍を超える売値でも、巨大ギルドの資本力の前では小銭に過ぎず、本当にギリギリまで炭を買われてしまった。

そしてその値上がりは一般市民の生活を直撃し、彼らの困窮の原因となった買い占めプレイヤーを恨む、というサイクルが形成されてしまった。

炭作りに集ったメンバーは、この状況をできるだけ早く沈静化させよう、という呼びかけに応えて動いてくれた人たちなのだ。

皆が協力して炭を大量に作り続けることで、炭の値段は緩やかに値下がりを受け、魔族領の街に漂っていた剣呑な空気は今では随分と穏やかになったそうだ。とはいえ買い占めプレイヤーに対する魔族の皆さんの冷遇は継続中で、こればかりはどうしようもないらしいけど。

まあ、高い授業料だと考えてもらうしかない。過去にあったポーション不足事件を忘れてしまったんだらうな……ましてや、炭が冒険のためだけに使う物ではないことを考慮しなかった点は擁護できない。無理せずに、外に出ないでできることをしていればよかったのに。

「よし、こっちは完成したぞー！ 運搬役頼む！」

「おう、任せろ！」

あちこちで炭を作るための煙が上がっている。出来上がった炭は、運搬担当が魔族領に三つある街に均等に行き渡らせる。魔族の皆さんからも歓迎され、細かいやり取りはなしで取引できるようになっているそうだ。自分はひたすら炭を作り続ける立場なので、その現場を実際に見たことはないのだが。

ただ、運搬担当の話では、高騰していた炭の値段はついに元の三倍を切り、魔族の皆さんの表情にもやっと余裕が出てきたという。

「今日で炭の生産も終わりだ、もうちょっとだから頑張ってくれよー！」

「……おぉー……」

誰かの声に、自分を含む職人チームの皆が応える。

今日で生産が終わりなのは、魔族の皆さんの炭作りがようやく終わって、各街に行き渡らせる準備が整ったとの連絡が入ったからだ。

自分たちがやっている炭作りはあくまで一時凌ぎでしかない。本来の生産者の仕事を奪うつもりはないから、魔族のほうの体制が整えばこちらは終わりとなる。それに炭作りばかりで全然冒険

に行けないのも困るし。アクアも頭上で退屈してるし。

とにかく、これで炭の一件はほぼ沈静化するだろう。

「こっちはもう材料が切れたー」

「こっちも今ので終わりだ！」

「こっちは最後の炭が仕上がったよー！」

あちこちから作業の終わりを告げる言葉が聞こえてくる。

この一週間、本当によく炭を焼いたよ……スキルレベルは大して上がらなかつたんだけどね。

まあ、放置できない問題であつたし、魔族の皆さんとの仲を悪化させないための行動なのだから決して無意味ではない。

これで、全てのプレイヤーが自己中心的ではないと分かってもらえるだろう……買い占めと無関係なのに冷遇される人が出て困るからな。

「よし、これにて全ての炭焼きが終了！ 皆様、この一週間お疲れ様でした！」

「「「お疲れ様でした……」」」

最後の粉殻の小山から炭となった木材を取り出し、運搬チームに手渡して、職人チームの仕事は全て終了した。

この後、職人チームは打ち上げを兼ねた宴会をフォルカウスの街で行うことになっている。運搬

チームは運搬チームで、運搬先の街で魔族の皆さんとどんちゃん騒ぎをすることのこと。

有志プレイヤーが協力した結果、魔族の皆さんとの仲が断絶せずに済んだお祝いだ。盛大にやつても構わんだろう。

食事の手配の心配は不要だった。何せ職人が集まってるってことは色々作れるってことで……自分の出番なんかなかったよ。どこの宮廷料理だ!? って豪華な料理から身近な料理まで、どつさりテーブルの上に乗った。

お酒だって当然プレイヤーメイド。どうやって作るのか、そっちの知識はからっきしの自分には真似できないなあ。そうして打ち上げという名のどんちゃん騒ぎは始まった。

「それにしても一昨日の一件は笑つたなあ」

誰かがそんなことを漏らした。一昨日の一件、というとあれか。炭を買い占めていたギルドの一つが、自分たちの炭焼き場を嗅ぎつけて、炭を売れとやや高圧的に言ってきたことだろう。

「あのときのアースさんの返答について領いちゃったよ。即答で『では、貴方のギルドの全財産と引き換えならお売ります。びた一文負けません』だろ？ あいつらが度を越えたせいで炭不足が起こつて、それを解消するために俺たちが動いてんのに何言つてんだ、って心の中で思つてたもんな。スーッとしたぜ」

——あのときは大人げない行動をしてしまったな。売って当然だなんて態度に憤りを感じて、

つい交渉という名の無理難題を吹っ掛けてしまった。まあ、万が一本当に資金全部を差し出してきただとしても、『やっぱりその三倍下さいね』なんて言っただけで突っぱねるつもりだったけどね。

こういうとき、ソコは気楽だ。あれこれ攻撃されても、被害を受けるのは自分だけで済むのだから。

「あいつらの悔しそうな顔はSSに撮ってあるぜ。いやー、リアルであんな表情浮かべる奴にはなかなか出会えんからな」

「おいおい、ほどほどにしてあげなさいよ。掲示板に晒したりしないで、個人で見分には何にも言わないけどさ……」

「で、その後の掲示板が面白いことになったよな。あいつら、アースさんの名前を出して非難した方がいいが、『アミーらが後先考えず炭を買い込んだのが原因だろうが、そのおかげで皆迷惑してるんだ！』って総ツツコミを食らって、もう言葉の袋叩き。おまけにそいつとそいつの属してるギルドが思いつきり晒されてたもんなー。風の噂じゃ、いつ空中分解するかカウントダウン状態らしいぜ？」

掲示板に限らず、炭作りを応援、擁護する声はとて多く、何人も差し入れを持ってきてくれたりした。この場合の差し入れとは、食べ物じゃなくて生産のための資金のことだ。そのおかげで、炭作りをしていた自分たちの懐は結構暖まっていたりする。

もちろん、そのお金に見合うだけの成果は出せたとと思う。出せたからこそ、今日で終わりになるんだし。

「とにかく、最悪の事態だけは避けられて何よりだ。いやはや、最初に炭不足の話聞いたときは冗談抜きで肝が冷えたぜ……『ワンモア』だと『もしも』が簡単に現実になるからなあ。今回の件で、生産職やってよかったって本気で思ったね！」

一人の職人の言葉に、他の人も全くその通りだと同調して笑い声上がる。

こうして、プレイヤーと魔族の皆さんとの正面衝突は回避された。めでたしめでたし……となつてほしかったんだけどなあ。

残念なことに、この話にはまだ続きがあったりする。

この一件に関して特に精力的に動いたプレイヤー……自分と『ブルーカラー』の協力メンバー全員が、魔王様より直々に呼び出しを受けてしまったのである。

#### 4

「今回のことは、まことに大儀であった。同じ愚を繰り返さぬよう、炭を扱う者に近々新しい決ま

りを纏めた指示を出すことにした。多くの民が貴殿らの働きによって命を救われ、厳しい吹雪を乗り切ることができた。全ての民に成り代わり、王として感謝する」

自分たちは魔王城に招待され、魔王様から直々に感謝の言葉を頂いた。

もちろん言葉だけではなく、一人当たり三〇〇万グローと、防寒能力のあるペンダントの改良型という報酬もついた。

この防寒のペンダント改(仮名)は、より防寒性を上げつつ消費するMPの量を減らすことに成功した一品なんだそうだ。そして普及品のような返却義務がなく、永久所有を認められている——自分には以前魔王様から貰った例のインチキ級のマントがあるので、あまり意味がないが。

「また、貴殿らを魔王領における名誉貴族とする。権力などは特にないが、今後は魔王領内にてロード、レディと名乗ることを許すこととする」

後で知ったことだが、魔王領内で勝手に貴族を名乗ることは、大きな罪となる。逆に言うと、何も権力がないとしても、貴族を名乗ることやそう呼ばれることは、魔族の皆さんからもすごい尊敬を受けるのである。

それを知った直後、ロナちゃんは「レディ・ロナ様とか呼ばれるのってすごいむず痒い！ そんな立派な存在じゃないよボクは！」なんて叫び、顔を真っ赤にしながら頭をがりがりと掻いていた。

自分も「ロード・アース」と名乗ることを許されたわけなんだが……うん、ものすごく似合わないね。

「これからも、魔族と人族が共に歩めるように懸け橋かはしとなってくれることを望む。以上だ」

なぜだか知らないが、今回の魔王様のお姿は全身フルアーマーだ。声もややくぐもっており、女性の声には聞こえない。まあ何らかの理由があるんだろうけど……

とりあえず、無事に謁見は終わった。それぞれ宛がわれた部屋に戻り、今日はこれでログアウトすることになるだろう。

なお、希望するならば魔王城内に滞在してもいいとのことのお許しも出ている。好奇心旺盛なノーラなどは、城内を見物してくると言い残し、動くメイド服——リビングメイドの一人を伴って早速行ってしまった。

「なんか、どつと疲れたぜ……まさか魔王様直々の呼び出しがあるとか、予想もしていなかったかなあ」

なんて言葉を零すこぼツヴァイ。見物に出かけたノーラを除くいつもの『ブルーカラー』メンバーは、今回の一件について話をしようと自分の部屋に集まった。

宛がわれた部屋はどこも十分に広かったのだが、自分に割り振られた部屋は特にデカかった。間

違いなく、「魔王の代理人」になっているからだろうか。

そして、自分の部屋だけが特別広いことに関する質問は全く飛んでこない。「アースだから、どうせまたなんかやらかしたんだろ」という認識らしい。まあそうなんですけど。

「それにしても、魔王様は格好よかったですね。鎧姿でお顔を拝見できなかったのは残念でしたけど、魔王様にも色々とお都合があるから仕方ないんでしょうし」

ミリーの言葉に頷く女性陣。あの鎧の自身は女性なんですけどね。

「魔王様が直々に、ということからして、炭不足はかなりマズい状況に陥ってたんだろな。褒賞がとんでもなかったからな……このペンダント一つとっても相当な逸品だぜ？」

レイジの言葉に反対意見は出ない。

「ともかく、もう完全に窮地は脱したと言えるわけですね。正直ホツとした、というのが私の感想です」

こちらはカザミネの発言。そうだな、自分もようやく肩の荷を下ろしてホツとできたと感じるよ。炭作りを始めたのは半ば思い付きだが、どうにかしなくちゃマズいと強く感じたのも本当だったわけ。

「それにしても、さすがは王ですわね……威圧感というか何というか、圧倒されましたわ。礼を言われているだけだというのに、私、震えが止まりませんでしたわ」

と、エリザ。ふむ、ドリルロールを備えているだけあって、高い立場にある人が醸し出す威圧感みたいなものに敏感なのかもしれない。偏見かもしれないが、どうしても金髪ドリルロールって貴族の子女のイメージが強いんだよね。それを口に出しはしないけど。

「魔王様もそうですけど、その横にいた四天王の皆さんも威厳がありました。よくある『奴は四天王の中でも最弱だ』のネタが一切通じない、強者の雰囲気は漂っていましたね」

エリザの言葉を引き継ぐようにカナさんが言う。実際、四天王の彼女たちもかなりの強者だからね。エキドナに死神、リビングアーマーにサキュバスクイーン。その気になれば鼻歌を歌いながらリアルに無双をやっちゃえる皆様です。

「その上美人揃いだったよね。一人は鎧姿で詳しくは分からなかったけど、あとの三人はおかしいレベル！あの顔、あのスタイル！下半身が蛇だったり黒いフードを纏ったりしてたけど、それでも分かる！女からすれば嫉妬しかないよ！」

このロナちゃんの発言に、皆が一斉にすっこけた。おいおい、あの謁見の最中にそんなところに注目してたんかい。今までの神妙な空気が木っ端微塵ですよ。

「あー、えーっと。なんか職人メンバーにも、顔を赤くしてる人が何人かいたねー。やっぱり四天王の皆さんの魅力にやられちゃってたのかもね。ま、まさかレイ君はそんなことないだろうけどね？」



おっと、レイジの恋人であるコンポタージュの声が、いつもより低いですよ？ レイジの返答  
次第では、小さいお子様にはちょっと見せられない状況が発生するかもしれません。

「当たり前だろ。というよりも魔王様の存在感に圧倒されて、他の人は全く目に入っていなかったぞ俺は。ロナのほうがおかしいんだ」

「ボクがおかしいってなんだよー!？」

——と、レイジは上手く悲劇を回避した。ロナちゃんが頬をハムスターのように膨らませてレイジをぼかばかと軽く叩きながら怒っているが、それぐらいで済んで何より、と言っているだろうかこの場では。

「とりあえずロナ、そこまでにしとけ。で、今後どうするよ？ しばらくは滞在してもいいってことだから、さっさと行っちゃまったノーラのようにしばらく魔王城の中のいろんなものを見せてもらうってのも悪くないよな？ その一方で、吹雪が収まったから各地にあるダンジョンで素材集めに励むって選択肢ももちろんある。このどちらにするかだけでも決めちまおうぜ？」

ツヴァイの提案に、うーんと首を捻る『ブルーカラー』のメンバーたち。自分は前に一回ここにきているし、長居しないですぐお暇いとまするつもりだけど……皆はどうするのかな。なかなか入ることができない場所だから、魔王城の中を見てみたい、って意見のほうが多そうなのがするけど。

「俺は魔王城の中を見てみたいな。この機会を逃したら次はいつになるか分からん」

口火を切ったレイジの意見に「ボクもそれに同意だね」とか「そうですね、こんな機会はそうそうないでしょう」と賛成ばかりが積み重なる。そして結局、ダンジョンに向かおうという意見は一切出なかった。

「なんかあつさり決まったが、簡単でいいか……で、アースはどうするんだ？　しばらく魔王城を堪能するのか、冒険を再開するのか」

ツヴァイからの問いかけに「冒険に戻るつもり」と答えようとして、自分はあるものに気がついた。それは、炭の一件で冒険が止まる前まで行動を共にしていたミリィ、カザミネ、カナさんの三人の視線。

三人は一樣に自分のことを見ながら、どこぞのテレビコマーシャルに出ていたチワワのような表情を浮かべていたのだ。まるで、「こんな滅多にない機会を、潰さないでくれるよね？　ね!？」と言わんばかりに。

そうか……ここで、自分が冒険に戻ると宣言するでしょう。自分の次の目的地は、あの植物系のダンジョン。で、あそこに行くとなれば、以前自分と同行してくれたこの三人も一緒に来ざるを得ない。仮に自分が一人で行くと言つても、ツヴァイはそれを遠慮と考えて、三人を同行させる気がする。つまり、三人は魔王城内の見物ができないわけ……

なるほど。ここで自分が冒険を優先すると、『ブルーカラー』内部に要らんいざこざを呼ぶかも

しれないな。

「そうだな、せつかくだし……自分も魔王城でしばしのんびりさせてもらうことにするよ」

そう口にした途端、ホツとした表情を浮かべる三人。さすがにあんな表情を浮かべられてはねえ。男女関係なしだったな……破壊力の大きさが。

まあいいさ、先を急ぐわけでもない。多分魔王城の中にもあるであろう訓練所を借りて、久しぶりに蹴り技の復習でもしよう。最近は蹴り技の出番がないからな。せめてトレーニンングくらいしておかないと、いざという時に困るかもしれない。アクアは寝てるだけになりそうだけだ。



翌日ログインしてみると、ツヴァイからメッセージが来ていた。「今日は『ドキドキ！　秘密の魔王城の中身をドーンと初公開！』ツアーに行ってくるぜ」という内容だ。

なんなんだそのタイトルは、と突っ込みたくなる。が、まあ放っておこう。リビングメイドさんの先導で魔王城の中を見て回っているらしいので、変な所に入り込む展開にはならないだろう。

さてと、それじゃあ自分は、鈍<sup>ツル</sup>つてしまっている蹴りの修練に行きますか。

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

近くにいたリビンググメイドさんに話しかけて、魔王城内に訓練場があるかどうかを確認。やはりあるということなので、自分が使用してよいかどうかを尋ねてみたところ、問題ないとお返事を頂いた。

城の兵士たちもおりますがよろしいですか？と確認されたが、それは別に構わないですと答える。これといって秘密の技を放つつもりもないし、ひとまず感覚を取り戻したいだけなので、見られても問題ない。

リビンググメイドさんに案内してもらって魔王城内を歩き、訓練場へとたどり着いた。

広い。地下にあるにもかかわらず、広々とした空間が広がっていた。運動場に、ダミー人形が配置されているエリア、何らかの特殊な訓練に使うと思われる妙な装置など……まあとにかく広い。

その広い訓練場のあちこちで魔族の兵士の皆さんが訓練を行っており、上官からの指示らしき怒号と、それに応じる熱い叫び声が幾つも飛び交っている。彼らの邪魔はしないように気をつけたい。

「それでは、何かありましたら入り口に控えているメイドに何なりとお申し付けください」

そう言い残して、案内してくれたリビンググメイドさんは立ち去った。

その後ろ姿を見送った後、ダミー人形の元に向かい、早速訓練に入る。訓練なので、普段足に付

けている武器は解除してある。

まずは基本のローキックを左右五〇本ずつ打ってみて、感覚がどれだけ鈍っているかを確かめよう。

(四七、四八、四九、五〇)

しばらく、無心に近い心境でローキックを打ち続けた。

そしてその結果分かったのは、予想以上に鈍っていたということ。

ゲームなので、鈍っていくようにステータスは落ちないし、スキルレベルだって落ちはしない。しかし、感覚としては相当な衰えを感じた。これはかなりマズい、今日一日は蹴りの訓練を行って、多少なりとも勘を取り戻さなくては。

それから、ざっと四〇分ほどだろうか？ ローキックをメインに据えつつ、ミドルキックにハイキック、水面蹴りモドキや飛び蹴りなど様々な種類の蹴りの練習を繰り返していたところ、声をかけられた。

「なかなか熱心だな。随分くたびれたマントに身を包んでいるが、どこの部隊の者だ？」

振り返ると、そこには黒い鎧に身を包んだ一人の魔族男性が立っていた。顔に刻まれたしわの深さからして、かなりの経験を積んできたベテランの戦士だろう。

この方、自分を魔族の兵士の一人と勘違いしているようだ。そんな誤解はさっさと解いておこう

と、自分は頭の装備だけ解除してフードを下ろし、素顔を見せる。

しかし、自分のマントがくたびれて見えたってことは、この方は部隊長とかそれぐらいの役職の人かな？ 魔族の中である程度上位の人には、本来の姿が見えるはずだから。

「私はこの城に仕えている兵士ではなく、ちよつとした活動が評価されて、一時的に魔王城での逗留を許された人族なんです」

顔を晒しながらそう返答したところ、魔族の男性は額に手を当てながら天を仰いだ。やってしまったー、という感じが漂う。

「これは大変失礼しました。魔族にはあまりいない体術の使い手でしたので興味を引かれたのですが……いやはや、お客人とは存じませんで……」

おそらくこの方は、自分が前に魔王城に来たときの一件を知らないんだろうな。まあそれは別に構わない。いちいち頭を下げられても面倒だからねえ。

「いえいえ、こちらもまぎらわしい格好で訓練をしていたのでお互い様、ということにしておきましよう。それでは訓練に戻りますので——」

と、ダミー人形相手の訓練に戻ろうとしたのだが、そこにまた声をかけられる。

「ダミー相手もいいですが、どうでしょう？ 一つ、私と手合わせといきませんか？ あそこなら色々調整もできますから、お客人の体が傷つくこともありませんよ」

魔族の男性はある施設を指さしながら、そんな提案をしてきた。

うーん、とりあえず話を聞くか。有益そうなら乗ればいい。

「申し訳ないのですが、実はここに来るのは初めてです。あの施設がどういったものなのか全く分からないので、説明をしていただければ——」

そう言うと、魔族の男性は施設の説明をしてくれた。

その装置は、一定範囲の地形がある程度操ることができるという物だった。石畳、滑りやすい足場、足首が埋まる沼など、様々なシチュエーションでの戦いが試せるのだ。

更に、一定のダメージを防ぐシールドの付与もでき、そのシールドが破れた時点で強制転移が発生、訓練中の死亡事故を防ぐ能力もあるようだ。

ちなみに作ったのは今代の魔王様らしい……これも魔道具研究の一環なんだとか。

「というわけでしてな、あれを用いれば、本気で打ち合いをしても再起不能や死んでしまうような心配がないのです。やはり本気の打ち合いは、戦士を鍛え上げるには最適な方法ですからな。今代の魔王様は、そうした訓練がはかどる様々な魔道具を作ってください。我らはその恩に報いるべく、平時でもこうして訓練を欠かさないというわけでしてな」

なるほど、訓練場に熱気が溢れているのはそういう一面があるからか。

とにかく施設の意味と役割は理解した。今日は基本的な蹴り方の修練だけしておくつもりだっ

たが、そこに固執する理由もない。動かないダミー人形よりも動く相手とやったほうがいい訓練になるのは確かだ。ここは話に乗っておくか……

「分かりました、お付き合いたします」

さて、魔族の皆さんは基本的に魔法が得意なわけだが、だからといって体かもやしみたいに貧弱なわけではない。直接ぶつかり合うとどうなるのかを知るには、いい機会だな。

以前戦った暴走魔力と似た感じか、それとも全く違うのか……やってみればわかるだろう。

## 5

「では、今回の訓練にあたって何か制限をつけるといった要望はありますか？」

そう言ってきた魔族の男性に自分が伝えた要望は――

一つ目、お互いにアーツや魔法、アイテムの使用を禁止し、純粋な体術の技量での勝負とする。何回か戦った後なら、この制限を解除してみるのもいいが。

二つ目、自らの戦闘スタイルの開示。ちなみに自分は、両手に装備している小盾と蹴り技のみで戦うと宣言した。つまり、盾に仕込んである隠しスネークソードは用いない。愛用の魔剣【まどか円花】

もなし。あくまで蹴りの訓練なんだから、当然使っちゃダメだろう。一方の魔族の男性は、剣と盾を使うオーソドックスなスタイルのようだ。

「では次に、戦う場所の希望はありますか？」

これは魔王領らしく雪原地帯とさせてもらった。これといって障害物も配置しない。蹴り技の確認が目的だから、そういったオブジェクトを利用する戦いは後回しだ。

「――これで設定は完了ですな。バリアの強さは、一般的な魔族兵士が戦闘不能になる体力消耗レベルに設定しております。このバリアを破られて強制転移されれば負けということでは」

今回、勝ち負けはどうでもいい。あくまで鈍った蹴りのカンを取り戻すことを最重要目標に置く。でもおそらく何度も戦っているうちに闘志が燃え上がってきて、悔しい、もう一回！となりそんな自分がいるんだよな。

ま、そうなったらそうなたでいいや。向こうが声をかけてきたんだから、ある程度付き合ってもらいましょうか。この施設の特性上、大怪我はまずあり得ないから、ちよくちよく休息を挟めば何回でも戦えるかな。

「了解しました。とりあえず二、三回戦ってみれば感覚を掴めると思っていますので、よろしくお願います」

フィールドに立ち、まずは一礼。その後、両者共構えを取って様子を見合う形になる。